

木幡順三の美意識論 —— 生き方としての美学

成城大学 柳澤 広美

木幡順三(1926-1984)は、「美意識」の語を前面に出した稀有な美学者である。この語はかつて「美的体験」と同義とされていたものの、既に佐々木健一『美学辞典』にて、「美意識」を「美的体験」の意で使う美学者は少数であること、「美意識」の語に執着した美学者としては木幡がいることが指摘されている。なぜ木幡は「美意識」の語を採用し続けたのか。

日本語の「美意識」は、元々対応語であったはずの *ästhetisches Bewußtsein* とは異なり、それによって生きる姿勢をも決め得る倫理的な意味を含み、またそれが日常語として残っている。木幡もその意味を重視し、かつ「体験」の語では言い表せない持続的な意味を「美意識」の語に託したといえる。主著である『美意識論』(遺稿・1986)にある通り、彼は「美的体験」を「人格的中枢を深く震撼させる出来事」と捉える。その出来事の生起には「時熟」が必要であり、美的体験は常に急襲的に起きるものだが、美意識にはそれを支える「美的意志」の潜在的傾向がある。美意識が生き生きと働くために必要なのは「驚異体験」であり、これはプラトンやアリストテレスらの古代の言説に依拠するものの、それを知だけでなく美の成立条件として認め、さらに驚異体験の内容が「無知の自覚」であるとする主張は独自のものだ。ここでは「無知の自覚」によって驚異体験の主体の側が変様することが求められている。こうした変様は、美意識を単に意識状態として捉え、その成立に至る諸条件をカント風の批判主義で吟味したところで究明できはしない。彼はこのように、美意識の成熟の先に人間の成長を求めており、そのような生き方の学としての美学を志している。

また『求道芸術』(遺稿・1985)では、まさに体験によって感得される価値だという意味で美と同じ根源を持つ聖が考察対象となり、「聖なるもの」の世界の開示について取り上げられるが、これもまた生き方を論じたものであり、『美意識論』と相互補完的に読むべきだ。「求道性そのもの」は「日常生活の根柢にも、芸術活動にもひとしく見出されるべき、人間存在固有の傾向」であり、こうした「道を求める」意志の働きは、美意識を保持する「美的意志」の潜在的傾向と重なる。彼は「美的理性」の語を用いながら美意識に根源的な「知慧」としての性格を認め、美意識を「悟り」だとすら述べる。いかに生きるかという問題意識による「美意識」と「求道」が捉えるものは、東西で限定されることはない。

木幡が「美意識」の語を使い続けたのは、生き方としての美学を追求するためだった。それは「求道」の語にも象徴されている。「美意識」は日常語として直接、また「求道」は修行実践という意味で、我々の日常生活に馴染んだ語である。美学を我々の日常的な生と切り離さずに考えようとするならば、木幡美学が果たす役割は大きいはずだ。